

認知処理理論に基づいた外国語教授法の感情面からの再考

—英語教育における文学の新たな視点の提案—

西原貴之（広島大学大学院教育学研究科院生）

キーワード：外国語教授法，感情，文学的読解

0. 本発表の概要

現在外国語教育研究の中で提案されている指導法の多くは認知処理理論に基盤を置いている。しかし、これらの研究は、学習者に言語形式に注意を向けさせることに集中しており、注意を向けられた言語形式が学習者の言語体系に組み込まれるための手段については十分に議論していない。外国語学習は記憶の一部である。記憶は感情によって促進されたり、抑圧されたりすることが知られている。従来の研究を見直してみると、感情については外国語学習を妨げる側面しかほとんど扱われておらず、それを促進する側面の扱いは周辺的である。本発表では、言語形式の記憶を促す感情を引き起こし、かつ教授法の基盤となっている外国語学習の理論とも矛盾しないものとして、文学的読解の有効性を提案する。

1. はじめに

現在、応用言語学において、認知処理理論に基づいた教授法が提案されている。それらの例を挙げれば、例えば *processing instruction* (VanPatten 1996)、*input enhancement* (Sharwood Smith 1991) などがある。こういった教授法の根底には外国語学習が生じるためには、学習者は意味理解をする中で言語形式に注意を払わなければならないという考えがある。言語形式が意味理解の中でなされなければならないとするのは、以前の形式偏重型教授法の失敗、学習という場であっても言語はコミュニケーションの媒体であるという考え、そして外国語学習には言語形式と意味のマッピングがなされる必要があるという考えなどによっている。

認知処理理論に基づいた教授法は、外国語学習が生じるためには言語形式に学習者の注意が向けられる必要があるという考えを中心に置き、このことを効率的に生じさせるためにはどうすればよいかを考えている。しかし、一方でわれわれは、注意を向けられた言語形式を学習者の言語システムになるべく効率的に組み込ませるにはどうすればよいかということを考える必要がある。この点については、認知処理理論に基づいた現在の教授法は、十分に議論がなされているとは言えない。

外国語学習とは記憶の一種である (Robinson 1995)。したがって、記憶が促進されるのはどのようなときであるかということを考えなければならない。最近の情報処理理論、脳科学、認知心理学の研究によると、記憶は感情により促進されるということが明らかにされている (Schumann 1994; 池谷 2001)。例えば、ある対象に対して感動したりすると、その対象が記憶として残りやすいことが知られている。しかし、感情が常に記憶に対してプラスに働くわけではない。例えば極度に緊張していたりすると、しばしば記憶は妨げられる。

このように感情は、記憶に対してプラスに働くとき（ポジティブな側面）とマイナスに働くとき（ネガティブな側面）がある。外国語学習は記憶の一種であるということ、感情は記憶に大きく影響を与えるということなどを考えると、われわれは感情という観点から外国語学習について考え直す必要があるだろう。次節では、外国語教育研究で感情がどのように扱われてきたかを考察す

る。

2. 外国語教育研究における感情の研究

まず感情ということについて一番に思い浮かぶのは情意フィルターである。これは先行研究の中でしばしば研究がなされてきた (Krashen 1985)。情意フィルターは、学習者のやる気がなかったり、強い不安におそわれているときにフィルターが高くなり、結果外国語学習を妨げると考えられている。先ほどの例で言えば、これは記憶に対する感情のネガティブな側面であると言えよう。

一方ポジティブな側面について考えてみると、まず Guiora *et al.* (1972)があろう。これは感情移入をすることが外国語の発音を学ぶには重要であるとした研究である。ポジティブな側面を扱った他のものとしては、サイレント・ウェイとサジェストペディアがある (Shanahan 1997)。これらは、学習者をリラックスさせ、言語学習が生じやすいような環境や雰囲気を作り出すことを重視した教授法である。

しかし、外国語教育研究の中でのこれらの研究の位置づけはかなり周辺的である。感情のポジティブな側面については、外国語教育研究ではあまり積極的に研究がされてきていないようである (Shanahan 1997)。Shanahan (1997)によると、外国語教育研究では、感情ということに関しては、外国語学習を妨げるものという観点でしかほとんど研究されていないとしている。

しかし、認知処理理論、脳科学や認知心理学が明らかにしてきているように、感情は記憶を促進するポジティブな側面をもつ。外国語学習の先行研究は、インプットの言語形式に学習者の注意をどのように向けさせるかということを中心に議論してきているが、一方でわれわれは、言語形式に対して学習者の感情を引き起こし、言語形式が学習者の記憶に残ることを促すような手法を考えていかなければならない。

したがって、この問題の解決策は、(1)意味理解の中で言語形式に注意を払うことを促すものであること、(2)注意を向けた言語形式に対して学習者に感情を引き起こさせ、記憶に残る助けをするものであること、の二点を満たすものでなければならない。本節で、感情のポジティブな側面を扱った研究として、Guiora *et al.* (1972)、サイレント・ウェイ、サジェストペディアを挙げた。しかし、これらはどちらかという学習者の情意フィルターを下げるということにその中心があり、ある対象について感情を引き起こすという本論の問題点とは多少異なる。そこでこの解決策を他の領域に求める必要があるだろう。次節では、この解決策として、文学的読解 (literary reading) を導入する。

3. 文学的読解

前節で述べたように、われわれは意味理解の中で言語形式に学習者の注意を向けさせ、かつ言語形式に対して学習者に感情を引き起こすことで記憶に残ることを促すような解決策を求めなければならない。この問題に関して、文学的読解を行うと、読者の注意が言語形式へ向けられるということと、言語形式に対して感情が生起し、それにより言語形式の記憶が促進されるということが文学理論の中で報告されている。本節では、この文学的読解について説明する。

まず、文学的読解の定義を示しておく。文学的読解とは、明示的に示されていない意味があるかもしれないということを期待して、それらの意味を読み取るために、普段よりも言語形式に着目するという読み方のことである (これは、Meutsch and Schmidt (1985)などに準ずる)。言語形式に着目するのは、意味理解のためであるので、外国語教育研究において述べられている、意味理解を妨げない範囲で言語形式に着目するという考えに矛盾するものではないと言えよう。なお、

文学的読解は文学の読解とは異なる概念であることに注意されたい（西原 2003）。

まず、文学的読解が言語形式への注意を促すということについての証拠を提示しなければならないであろう。Zwaan (1993)によると、あるテキストを半分の被験者には新聞の記事であると言いい、残り半分の被験者には文学作品の一部からの抜粋であると伝えたところ、前者は文学的読解を行い、後者に対して、言語形式の再生テストと再認テストの成績が有意に上回った。また、遅延テストでも同様の結果を得た。Jourdenais *et al.* (1995)によると、再生できるということは、その情報が処理されたときに、その情報に対して注意が向けられていたということである。つまり、Zwaan (1993)の実験で言えば、文学作品の一部であると伝えられた被験者は、新聞記事と伝えられた被験者よりも、テキストを読んだときに言語形式に注意を払っていたと言える。このことから、文学的読解は言語形式に注意を払うという条件を満たしていると言えよう。

もう1つ、文学的読解が満たさなければならない条件は、感情面についてである。Kneepkens and Zwaan (1995)によると、文学的読解には大きく2種類の感情が伴うとしている。それらは F-emotion と A-emotion である。前者は更に F(a)-emotion と F(e)-emotion に分けられる。F-emotion は、テキストの理解に関わり、作品内に展開される虚構世界の出来事に伴う感情である。F(a)-emotion は、F-emotion の中でも特に、物語の中に描かれている登場人物や状況に関連した感情である。F(e)-emotion は、物語に意味を付与するために、読者が自分自身の感情経験を活性化させることに伴う感情である。

この F-emotion は、情意フィルターを下げるといった面、すなわち、外国語教育で今まで研究されてきた感情のポジティブな側面に関わる研究 (Guiora *et al.* (1972)、サイレント・ウェイ、サジェストペディアなど) と関連していると考えられる。したがって、F-emotion に関しては、外国語学習に対してはプラスに働くとは考えられるが、本論で提示した問題点を解決する手段となることは難しいと考えられる。

一方の A-emotion は、作品の中に含まれている言語的技法に伴う感情である。ある言語構造に対して、その音の響きがおもしろいと感じたりする場合には、この感情が生起していると考えられている (Kneepkens and Zwaan 1995)。A-emotion は、文学的読解における表層情報の記憶を促進しているとされ、表層情報の再生、再認に関わっている。例えば、先ほど引用した Zwaan (1993)の実験結果は、この A-emotion が引き起こしたと考えられる (Kneepkens and Zwaan 1995)。また、逆を言えば、この A-emotion が生じないと、言語形式の記憶はあまり残ることは期待できない。

A-emotion は、言語形式に対して読者が引き起こす感情である。この感情が生起することによって、読者の中にその言語形式が記憶されることとなる。このことは、先ほど提示した問題点の (2)、つまり、注意を向けた言語形式に対して学習者に感情を引き起こさせ、記憶に残る助けをするものであること、という点を解決するものとして期待することができる。

ここまで文学的読解について簡単にまとめてきた。文学的読解は、意味理解のために言語形式に注意を払うという点と言語形式を再生、再認することができるという点から、第一の条件、つまり(1)意味理解の中で言語形式に注意を払うことを促すものであること、を満たすと考えられる。また、A-emotion は、テキスト内の言語構造に対して感情を引き起こさせ、それが読者の言語形式の記憶を促しているという点で、第二の条件、つまり、(2)学習者の中に、注意を向けた言語形式に対して感情を引き起こさせ、記憶に残る助けをするものであること、を満たしていると考えられる。しかし、本論で引用した文学的読解の研究は第一言語によるものであるという点と、言語教育というよりも文学教育という枠組みでの研究であるという点から、直接応用することは難しい。今後、外国語教育研究の先行研究とすり合わせることで、外国語学習に使えるような形へと加工されていくことが必要である。

4. 結論

本発表では、外国語教育研究における認知処理理論に基づいた外国語教授法の問題点を解決するものとして文学的読解を提案した。これは最終的な解決策にはならないかもしれないが、外国語教育研究の中で今後外国語学習を促す感情について考察がなされていく際の足がかりとはなろう。

文学は外国語教育研究の中で長い間扱われてきたトピックであるが、Shanahan (1997)が指摘するように、第二言語習得論に基づいた研究との間に乖離が見られる。しかし両者はそれぞれ長年にわたり研究がなされてきており、それぞれの知識の蓄積がある。本研究が示したように、第二言語習得理論に基づいた理論と文学を基盤とした理論をすり合わせていくことで、よりよい外国語教育の構築のために研究がなされていく必要があろう。

参考文献

- Guiora, A., Beit-Hallahmi, B., Brannon, R., Dull, C., and Scovel, T. (1972). The effects of experimentally induced changes in ego states on pronunciation ability in a second language: an exploratory study. *Comprehensive Psychiatry*, 13 (5): pp.421-8.
- Jourdenais, R., Ota, M., Stauffer, S., Boyson, B., and Doughty, C. (1995). Does textual enhancement promote noticing? A think-aloud protocol analysis. In Schmidt, R. (ed). *Attention and awareness in foreign language learning*. (pp.183-216). Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- Kneepkens, E. and Zwaan, R. (1995). Emotions and literary text comprehension. *Poetics*, 23 (1-2): pp.125-138.
- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.
- Meutsch, D. and Schmidt, S. (1985). On the role of conventions in understanding literary texts. *Poetics*, 14 (6): pp.551-74.
- Robinson, P. (1995). Attention, memory, and the “noticing” hypothesis. *Language Learning*, 45 (2): pp.283-331.
- Schumann, J. (1994). Where is cognition?: emotion and cognition in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 16 (2): pp.231-42.
- Shanahan, D. (1997). Articulating the relationship between language, literature, and culture: Toward a new agenda for foreign language teaching and research. *The Modern Language Journal*, 81 (2): pp.164-74.
- Sharwood Smith, M. (1991). Speaking to many minds: On the relevance of different types of language information for the L2 learner. *Second Language Research*, 7 (2): pp.118-32.
- VanPatten, B. (1996). *Input processing and grammar instruction*. New York: Ablex.
- Zwaan, R. (1993). *Aspects of literary comprehension*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 池谷裕二. (2001). 『記憶力を強くする 最新脳科学が語る記憶のしくみと鍛え方』. 講談社.
- 西原貴之. (2003). 「インプットの言語形式への注意と文学的読解プロセスの関係ー第二言語習得のための理論的考察ー」. 『日本教科教育学会誌』. 26(1): pp.41-50.